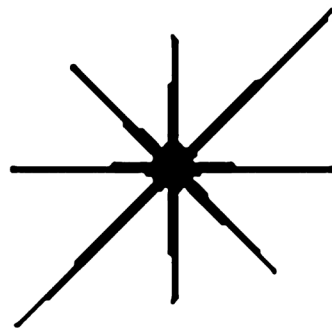


コメット通信 31

[’23年2月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 3

中村邦生

10 お電話、お待ちしていまーす

M証券の某氏からのショップ・チャンネルの情報。商品の先駆性から株価が上昇する気運のあるメーカーなのかもしれない。何か見当違いをしているのだろうと志村邦彦は思ったが、案内のとおり早朝6時の時間帯に放映されていた。

テレビ・ショッピングのT商事・W社長が、かく語る。

——はい、おわかりいただけましたでしょうか、きっとお年を召したお宅のワンちゃんもネコちゃんも、跳び上がって大喜びするはずです。飼い主さんの声が大きくクリヤーに聞こえる、ペット用の耳穴集音器！ 充電式なので面倒な電池交換が不要、先日大きな反響と強いご支持をいただいた、あのワンちゃんネコちゃん用の老眼鏡に続く、画期的なペット商品です。

はい、みなさん、ただいまから30分、特別価格のご奉仕値段でご提供します、送料込みで5,980円ですが、今日だけの大幅値引きで、さらに2,000円引いて、何と3,980円、3,980円です。愛するペットちゃんとお暮らしのみなさん、お電話お待ちしております。フリーダイヤル、8080-5963-80です。やれやれーごころうさんーやれ、と覚えてください。お電話番号をお間違いのないようにお掛けください。

さて、みなさん、お待たせしました。本日の超特別商品、いよいよ登場です、これさえあれば、みなさんの長年の深い悩みが、いっぺんに消え去ることは間違いなし、よろしいですか、メモの用意をなさってください。

はい、それではご紹介します、これです！ いよいよ待望の商品の登場です。

なんと、なんと、足裏バリカン「バルカン1号」！ でも、お待ちください、これまであったペット用の足裏バリカンとはまったく違うんです。切れば切るほど延びてくる、あのやっかい極まりない、人間特有の剛毛、縮毛、巻き毛が、たちどころに除去できるんです。

ご覧ください、この頼もしい回転刃、ここにメカニズムの企業秘密があるのです。これまで誰もが処理に困ってきた、足の裏に無遠慮にどんどん生えてくるジャングル化の一途をたどる毛髪地帯の悩みが、これからは、どのような悪条件にある毛でも、そっと足裏に添えるだけで、すっきり消えていきます。これまでどこのメーカーも解決できなかった、毛根の奥の奥まで、すっきりと切り取ります。ですから、二度と生えてきません。しかも切り取った毛は、たちどころに超微粒子へと粉末状態にしてしまいます。しかも静かでノイズはありません。ペット用の足裏バリカンでしたら、この振動音がワンちゃんやネコちゃんを恐らせて、ブルブル体を震わせてしまったのはご存じのとおりですが、これは違います。この静粛性、すごいです。蚊の音のほうが大きいくらいです。

ただし、みなさん、一つだけご注意ください。この画期的な足裏バリカン、ペットちゃんたちには決してお使いにならないでください。毛根の奥まで作用して、永久脱毛に近い効果がありますので、ワンちゃんネコちゃんには強すぎます。人の場合も、お体の他のブッシュ地帯にはお使いになることはお勧めできません。あくまでも、私たちが悩ましてきた足裏の獰猛な毛髪退治のために特殊開発された商品です。

さて、この「バルカン1号」, お手入れも簡単, 水洗いオーケー, こんな便利な道具が欲しかった, と大きな歓声が聞こえるようです。すでに試作品のモニター段階で, 足裏に30センチもあるふてぶてしい長髪が, たったの3分で処理できたのです。何しろ場所が場所だけに, 毛がからみついて, じめじめ不衛生きわまりないじゃありませんか。嫌ですね, みなさん。でも, これからは, すっきり快適生活が約束されますよ。

いたずら盛りのネコちゃんと一緒に暮らしのかたは, ゆらゆら動く足裏の毛髪に飛びかかっては, じゃれつくネコちゃんに, ほとほとお困りだったと思います。しかし, みなさん, もう大丈夫, この新登場の足裏バリカン「バルカン1号」が, 私たちの悩みを解決しました。医療器具ではありませんので, 誰でもお気軽に手にすることができます。

それにしても, 21世紀の奇病と言われてきた足裏の異常な毛髪の繁茂と群生, 20世紀を通じて, 私たちはあまりにハゲを憎悪し, 抑圧し, 虐待し, 笑いものにしてきた結果, いつしかハゲの激しい反発と怒りと復讐に遭い, 「おう, それならどうぞこ生えてやろうじゃないか」と爆発的な一斉蜂起, 怨念まみれの一念発起で, 雑草のようにたくましい, そして除去のきわめて困難な, 大量の毛髪が足裏にはびこる事態に直面してきたわけです。

でも, はい, みなさん, 今やこれほどの朗報はありませんよ。この驚くべき新製品の足裏バリカン「バルカン1号」こそが, 足裏に異常増殖し続ける体毛どもを退治するのです。そして足裏をすっきりと理想に近いハゲ状態にする「バルカン1号」, いよいよそのお値段の発表です。

本日のみの特別価格29,900円です。これだけ画期的な機能を備えた製品が, 29,900円ですよ, みなさん。しかし, ちょっとお待ちください, ここまで視聴していただいた方に感謝を込めて, さらに5,000円の値引きをして, 24,900円でご提供します。みなさん, こんなチャンスは二度とありません。ですが, 今から30分以内の申し込みの方には, さらに特別価格でご提供します。いいですか, みなさん, メモのご準備はよろしいですか?

なんと, なんと, 送料込みの19,900円でお分けします。お急ぎください, みなさん。さあ, 「バルカン1号」, 一家にひとつゲットするチャンスです, 今すぐお電話ください。受付電話を増やして対応中です。では, フリーダイヤル, 8080-5963-80です。やれやれーごくろうさんーやれ, と覚えてくださいね。どうか番号のお間違いのないようにお掛けください。8080-5963-80, やれやれーごくろうさんーやれ。では, お電話, お待ちしてまーす。

11 寒さだけは苦手です

多肉植物スタペリアが, かく語る。

——あたしたちの存在に気がつかなかった? どこを見ていた? こんな目立つ姿をしていたのにな。もっとも当時はまだスタペリアの鉢植えなんか, 普通の花屋にはなかったから, しかたがなかったかもしれない。吹きさらしの店には向かないんです。あたしたちは, たっぷり幹に水分を貯えていて乾燥には強いけど, 何しろアフリカが故郷なので, 寒さだけは苦手なものですから。

葉は退化しています。いや, この「退化」という表現, あたしは前から気に入らない。単に生きていく環境に合わせて「変化」してきただけのことですからね。葉じゃなくて, 莖で光合成しているなんて, たいした適応能力でしょう? でも, 「多肉植物」という言葉も, 何かグラマラスなスタイルを感じさせて悪くはないけど, ほら, この毒々しい紫色のヒトデに似た大きな花びら, どちらかと言えば, 不気味な雰囲気をあたりに放って, マニアックな花好きならそられるでしょう?

そうか、見たことないんですかね？ あの店にあったのを気づかなかったとは、いかにも迂闊^{うかつ}だったと思います。

あなたは宇品という、少年時代に野球のコーチを受けた人物のことに関心が集中していたのはやむをえない事情だけど、でも、シュラブ・ローズという花へは注意を向けたし、ケチなあなたにしてはアザミを5本も買っていったじゃないですか。

もちろん、あなたの『幽明譚』の中の「シマウマ模様のような」に出てきた、京王線つつじが丘にあった花屋のことですよ。スリ稼業の一家に生まれた「ジュン坊」が、その後どうなったか、なるほど私みたいな立場でも気になります。二十歳の年、あなたは榮太樓本舗で羊羹作りに励んでいたときに、かつて杉並の〈母子ホーム〉に一時避難してきた「ジュン坊」の消息を知ろうと、勤め帰りに元ヤクザの宇品の生花店を訪ねたわけですね。それこそ、店で一番目立つ花が、このヒトデに似た色と形のスタペリアだったはずだけど、目に入らなかった？ 鋭い目つきで丸椅子に座って店番をしている宇品の近くに並ぶ、毒々しい見栄えで人目をひくスタペリアの私とは、とても似合いの情景になっていたと思うけど、見逃したとは残念ですね。

でも、言いたかったことは、これだけじゃない。前に、73年生き長らえているとかいうカマキリが登場していたでしょう？ 荻窪の家の庭で遊ぶあなたの5歳の姿を見たとかいうカマキリです。「あの少年のことは、よく覚えている」という文章でしたっけ？ はっきり言えば、「擬態」という言葉はかなり目障りに使っていたように思うのですが、あたしたちスタペリアだって、それなりの騙しの術は持っているんです。それを忘れないでいただきたい。

もちろん、悔しいけどカマキリさんたちの「擬態」とは、比べようもないくらい地味なものです。が、れっきとした騙しのテクニックがあります。花びらの色は赤紫というか、赤褐色というか、腐った肉に似た色をしています。見た目ばかりじゃなくて、腐肉の臭いまで宙に放っているんです。しかも、繊毛みたいな白っぽい毛が生えていて、腐った肉に浮きだしたカビの真似までしているんですから、なかなかのものじゃありませんか。これに誘われて腐った肉が大好きな蠅がやってきて、色も臭いも感触も確かに肉だと信じて、卵を産みつけるんですけど、腐肉と錯覚して歩き回る蠅の脚に花粉がくっついて雌しべに運ばれる。これって、あたしたちとすればシンプルだけどよくできた欺きのテクニックですね。

まあ、それだけのこと。特に偉そうなことは付け加えません。自然界は、どんな地味なものでも騙しのテクニックがなくちゃ成り立たないとか、人間界は助け合いと騙し合いは紙一重なんていうこと、わざわざ述べるつもりもありません。それにしても、あの花屋の母子家庭に入り込んだ元ヤクザも気になります。両親からスリのテクニックを伝授されることを拒んだ「ジュン坊」は、その後どうしたんでしょうね。どこでどう生きているか。ところで、いまいるここはどこか判らないけど、やけに冷たい風が吹き込んできて困るんですよ。とにかく寒さだけは苦手ですから。

12 二十歳のカーニバル

「あなたは二十歳のころ、どのように過ごしていましたか」と言う某雑誌の質問に答え、作家Nが、かく語る。

——うれしくない質問だ、とまず言っておきたいのです。二十歳の日々、特別なことは何もなかったからです。何もないという言い方が、不正確なのは承知しています。と言うか、ある意味で、いろいろありすぎて凡庸な印象しか残っていないというのが、正直なところ。回顧しつつ懐かしみ、

心はずむことなど何もないのです。

4月21日の誕生日など、過ぎて気が付くだけで祝うこともなかったし、当然のことながら「成人式」など関心もありませんでした。

「二十歳して心朽ちたり」といった早熟な感慨ありません。あるいは頹廢への気取った憧憬などもあるはずもない。

金もなかった。将来への希望もなかった。鬱勃たる思いもなかった。

恋愛も無縁だった。酒も飲めなかった。煙草も吸わなかったし、博打も競馬も競輪もオートレースもしなかった。

「風俗」などと言う場所も、近づいたこともないし、足を向ける「お足」もなかったし、意欲もなかった。

高校生の時と異なり、ベトナム戦争と日米軍事同盟への抗議集会にもデモにも行かなかったし、街頭で怒りと抵抗の拳を振り上げることもなかった。

怒りの叫び声を上げる同世代の連中に、連帯も共感も、反発も冷笑もなかった。

清水谷公園近くで、機動隊に向かって自ら投石をした2度の機会も、ほとんど同じ無力な思いに沈んで、何かしら突起した感情はあるようで、やはりなかった。

殺したいやつが最低3人はいたが、実行できなかった。

70歳を大幅に超えた今になって、2人に減少したが（同一人物ではない）、やはり実行に到らなかった。呪詛はしても呪い殺すところまでは、幸か不幸か到らなかった。今ではなおさら不可能になった。やつらはもう死んでしまったから。

ほとんど映画も見なかったし、芝居も音楽会も行くことはなかった。展覧会もほとんど行かず、チラシだけ集めていた。しかし、会期が終われば、あっさり捨て去った。

択捉島、熊野、佐多岬、恐山、平戸、天草、ウスアイア、パラオ、ニューギニア、トリエステなど、行きたいところは数多くあったことは確かだが、旅も遠い夢のごとしで、夢の実現の機会など皆無だった。

いまだに、その三分の一も行っていないし、これからだって、実現できるか判らないし、たぶんないままに人生を終わるだろう。

友達もいなかった。欲しいとも思わなかったし、友人になろうと近づいてくる者も、とりたてていなかった。

かといって、今でいう「引きこもり」の傾向などはなく、あてどなく街に出かけることは、かろうじて好きな習慣ではあったが、入りびたる心地よいところなどなかった。強いて言えば、最近移転したらしい杉並区立永福図書館だろうか、閲覧室へほぼ日曜日ごとに出かけた。

ここに所蔵してある全集本は、月報類をホッチキスで止めビニールテープで表紙裏に貼りこんであった。なかなか合理的な方法だと自分でも真似をしたのだが、年数がたつとビニールが劣化して見苦しい姿に変わり、古書店に持ち込んでも値段がつかなくなってしまった。

いずれにせよ心身にいちばん堪えたのは、やはり何といても金がないという現実で、これがすべての元凶であり、形而上的思念などに耽溺できるはずもなく、高邁な理念に思考を泳がせることなども無縁だった。

とにかくいつも空腹だった。ひもじさに耐えかねて、渋谷でうっかり予定外のラーメンを食べてしまつて電車賃がなくなり、高井戸の自宅まで井の頭線の線路沿いを歩いて帰ったこともある。

……と、いった具合に、二十歳の日々を回顧すれば、「なかった」を列挙し、凡庸きわまる「ないない尽くし」となってしまうのです。

では、何をして日々を送っていたのか？

その一端は、『幽明譚』で触れています。金を貯めようと、日本橋郵便局で書留便の住所をノートに記録する仕事をしたり、江戸川橋の東京出版販売で、新刊の仕分け作業をしていました。ある日の昼休み、若い仲間に冗談で上手に本を盗み出す方法を話したら、中途半端に実行するアホがいてあつげなく発覚し、私は教唆の責任を負わされて臍になった上、給料はなし、交通費だけの支給になってしまいました。警察に通報されないだけ、よかったわけですが。

次の榮太樓本舗では、小豆と砂糖を大型のボイラーで煮込む羊羹作りに励みました。危険手当が付き、この職場が一番稼げたと言えます。仕事が終わってから、週に3日ほど千駄ヶ谷の津田スクール・オブ・ビジネスに英語を習いに行き、後の2日は予備校の代々木学院の夜間コースで、古典と漢文の授業に潜り込みました。

古典の講師は若き万葉学者の中西進、漢文は『大漢和辞典』を修訂編纂した重鎮の鎌田正という豪華な顔ぶれでした。2人とも大学受験講座などからしばしば逸脱して専門的講義へ進んでいくのです。私はあてどなく漂流しているような毎日で、しかも授業料を払わない潜りの身ですが、ふらりと頻繁に足を運びました。

やがて廃校になるこの代々木学院の校長は、幼児教育を含めて幅広く学校経営をしていた学校法人内海学園の内海暢子という人で、予備校生たちに「若人よ、飛龍となれ」と古めかしい檄を飛ばしたりして、その思い込みの空転ぶりが、いささか愉快でした。傾倒していたシュタイナー教育とどのように関係があるかは不明です。

後で気がついたのですが、この予備校は各大学の名だたる研究者たちに、小遣い稼ぎのアルバイト先を提供していたんですね。それで、予備校でありながら、大学の講義を聞きみたい雰囲気があったて、私としては日本と中国の古典籍への読書欲を刺戟されたことは確かです。

中西進は、ときどき自作の短歌・俳句を披露することもありました。「^{はねや}羽破れし蝶、陽だまりを悲しうす」が、その一つとして記憶しています。当時の私の心情に重なるものがあったのでしょうか。

羽の傷んだ蝶が、陽だまりに悲哀の影を落としているというイメージで、かなり後年に到ってですが、自作の小説に転用させてもらったことがあります。

長いような短いような、こうした二十歳の日々、懐かしさなどほとんどありません。

おおよそ以上の話を友人2人に話したことがあるのですが、それぞれ意外な感想を眩きました。1人はこうです。

「1960年代後半は、こうした地下生活者のような息苦しさを感ずる時代で、つきつめればこの二十歳の青年は、これから犯罪者になるか小説家になるか際どい岐路にいたように思える」というもの。

もう1人は、「この『ないない尽くし』の現実をフィクションへと反転させ、むしろ現実の方を影にして、『あるある尽くし』をリアルな夢想として二十歳の姿を描き出したら、どうなるか」という問いでした。

つまりは現実が夢想の声色を使う試みです。「ないない尽くし」の現実が、夢想のような「あるある尽くし」の擬声を発することになるわけです。

何やらグレート・ギャツビーのような華麗なる日々、その二十歳のカーニバルの歓声が聞こえてくる気がします。

では、例えばどのような「あるある尽くし」の日々だったのか。以下、思いの動くまま記してみます。「二十歳して心朽ちたり」といった爛熟な思いが早くもうごめいていたのです。あるいは頹廢への高雅な憧憬も心のうちに秘めていました。

金はあまるほどあり、二十歳の身にとっては、月の小遣いが30万円ともなれば、大学卒の会社員の初任給が3万円ほどであった時代を考えれば10倍ですし、ほぼ不自由はなかったと言えます。

将来への展望も大きく開け、どこへ進み何に我が身を投資しても可能性にあふれ、選択に迷うことが唯一の悩みでした。

若者らしい鬱勃たる思いも深くいただき、人妻を含む3人の女性との恋愛も順調だった。酒もナポレオンを中心に愛飲し、煙草はもっぱら缶入りショート・ピースでした。

博打も競馬も競輪もオートレースもやり放題、特に歌舞伎町界限と府中競馬場にはよく行きました。「風俗」と言われる場所もなじみで、金に糸目をつけず、2人同時のサービスを受けたりもしましたが、それでもなお意欲満々、朝まで疲れを知りません。

高校生の時に引き続き、ベトナム戦争と日米軍事同盟への抗議集会にもデモにも出かけ、街頭で怒りと抵抗の拳を突き出しては、激しく体制批判をする同世代の仲間に連帯と共感の声を上げ、清水谷公園近くで機動隊に向かって自ら投石をした2度の機会も、石は意外に的確な軌道を保ち、自らの腕力を確信し、昂ぶる未知の感情に酔ったのです。

殺したいやつが3人いたが、いずれも自らは手を下さず、しかるべき専門家に始末してもらいました。合掌。

70歳を大幅に超えた今になり、対象は2人に減少したが(同一人物ではない)、やはり同じ方法に頼っているとやりたいところですが、幸か不幸かそれには到りませんでした。やつらはもう勝手に死んでしまったからです。

今も昔も、呪詛し呪い殺すとなどという面倒なことはしません。金さえあれば、その必要はないのです。

映画も芝居も音楽会も展覧会も、気ままに好きなときに出かけました。

もっとも音楽会は出かけるばかりではなく、ミュージシャンを自宅に呼んで演奏してもらいました。ソプラノ歌手のキリテ・カナワ、ピアノのミケランジェリ、ヴァイオリンのアイザック・スターンといった人たちは、わけても心に残っています。ミケランジェリの場合、30分遅刻して来て、不機嫌そうにドビュッシーの『子供の領分』から3曲だけ弾いて帰ってしまったのですが、それでも見事な演奏に接し、自分ながら卑屈なほどに満足感を覚えました。

択捉島、熊野、佐多岬、恐山、平戸、天草、ウスアイア、パラオ、ニューギニア、トリエステなど、行きたいところは数多くあって、すべて順に回りました。

今からだって、キューバの悪名高い刑務所のあるフベントゥド島とか、アーサー・コナン・ドイルが『失われた世界』のモデルにした、でも実際には想像で書いた、ベネズエラのロライマ山などへの旅をしたいと考えていますし、ふらりと来週にでも出かけてみるかもしれません。

友達もたくさんいました。欲しいと思わなくても、向こうからどんどん近づいてくるので困りました。あまりに多いので、玄関脇に順番待ちの受付ボードを作ったくらいです。

タイプの違う友人関係を持っていることも自慢で、東京芸大で芸術学を専攻しているグループと付き合っ、いっしょにランボーやボードレールやマラルメの詩なんかをフランス語原文で読み、たがいの詩作を交換しあったりしながら、谷中の喫茶店から夕焼けに染まる空を眺めたりしていたのです。

他にもちょっと年上ですが、牛原仁太郎という私以上にボンボン育ちの悪ガキがいて、湘南海岸をアメ車のオープンカーで走り回って、腰の軽い女の子を次々とナンパするんです。私には何が楽しいのか理解できませんでしたが、そんな牛原が後に政治家になったのには驚きました。莫大な選挙資金がいるとのことで援助もしましたが、先ごろ引退して、ギリシャのミウラハヤーマで老いた肌

をさらしながら、地中海周遊の船遊びをして暮らしています。私の人徳のいたすところ、まさしく類は友を呼ぶでしょうか、こんな最低な友人がいたことも、それなりに誇りにしているわけです。

とにかく、心身ともに堅固な自信の元になっていたのは、やはり何ととっても金ですよ。これがすべての土台であり支柱でした。筋力は金力に通じる、まさにそのとおりです。

どうしたって金がなければ形而上的思念などにも関心を持てるはずもなく、高邁な理念に思考を泳がせることなども無理難題でしょう。貧すれば鈍する、衣食足りて礼節を知る、これは万古不変の真実です。私はその典型的な好例です。こんな謙虚な物言いも、金力があればこそその余裕です。

と、まあ、このあたりでいいでしょう。こんな声色を使うのは、けっこう疲れるものだと今更ながら知りました。華麗なる二十歳のカーニバルの歓喜など、擬声を絞り出すのも、あるいは聞くのも、たちまち厭きて疲労が溜ってしまうようです。それならば、やはり貧乏臭い話こそが千載不磨の慰めになるのでしょうか？ それはどうなのか判りません。いささか大げさな問いになりかかってしまうのも、華麗なる二十歳の声色の余熱みたいなものだと思います。

13 成績を修正します

『幽明譚』の「この事件、語りえることはない」に登場した中世哲学者のK師が、かく語る。

「恙なくお過ごしでしょうか。ご恵与頂いた小説、どちらも昨日ようやく読み終わりました。蝸牛のようなのろのろ読みですが、速く読んではいけない作品であることはすぐに判断できましたから、ゆっくり、ゆっくりです。そういうわけで、感想と質問があります。来週はどうでしょう、話に来ませんか。木曜日以外なら結構です。午前の早い時間だと助かります。如何かな。」(K師のメール)

〈K師は、今年の11月に97歳。まだ論文を書き、学会発表をする驚異的な人物である。Nは大学2年生のときに、一般教養科目の「哲学」を受講していらい、親しく対話の相手を続けている。悪天候の日だったが、西東京市の介護老人ホームを訪ねると、歪みと反りの出た檜の大きなテーブルの上に、付箋だらけの本を置き、ノートを広げて待ち構えていた。夫人はK師より体力が弱っていて、ほとんどの時間を寝室で休んでいる。K師はその部屋とは別に一室を書斎にしているのだが、パソコン台の脇から左右に本が不安定に積み上げられ、現役感に満ちている。ペランダ越しに遠く農家の屋敷林が見え、竹林が風雨に揺れていた。〉

——いや、いや、面白かった。N君の仕掛ける、あれやこれやの術中にはまるのを、さんざん楽しんだよ。

一緒に送ってくれたやつがあるよね、何だっけ、ああ、ここにあるか、『コメント通信』25号。この「特集・Nのフィクションの仕事」も読んでみたけど、愉快だな、評者が5人とも作中に何か騙しの穴ぼこが掘ってあるかもしれないって、落ちるのを警戒しながら実に楽しそうに読んでいて、なかには逆にNを騙してやろうかって企んでいる文もあったり、この執筆者たちの読書の賑わいは素晴らしいね。みんなそれを実に上手に書いていると思ったよ。

いや、いや、私はもっとナイーブな読者だからね、ご勘弁願いたいよ。何しろこの歳だから、ややこしいことは、ノーサンキュー。それで、ナイーブだからこそ、不覚の涙をこぼしてしまった話もあるよ。オレンジ色の少女のエピソードだけど。えーと、何ページだったかな。えーと、ノートのメモを辿っていけば、わかるかな。

いや、その前にこの最初の「運不運のみぎわ」ですがね、時空をこえて神田川とライン川が合流する情景には驚いたな。バーゼルのライン川の中州にあるスイス、フランス、ドイツの国境の交点と、

神田川の左衛門橋あたりの台東区，中央区，千代田区，あと駒塚橋の近くかな，文京区，新宿区，豊島区の交点を重ねてしまうとはね。

そう，そう，ロバの鳴き声のエピソードが出てくるでしょう？ ドストエフスキーの『白痴』のマイシュキン公爵が，スイスのバーゼルの町に入る。すると市場からロバの鳴き声が聞こえてくる。彼はこの鳴き声に感動して，心が晴れわたる。たちまち公爵はロバが好きになり，これによってスイス全体が好きになるわけですね。N君はこの場面にいつも喜びを覚えて，これによって『白痴』だけでなく，小説というものが好きになってしまうほどだ，と書いていますね。

えーと，そう，この一節だけど，ノートに書きとったんだ。「個別的なものへの感動が，全体への肯定的感情の横溢おおいっに反転する。小さな記憶への愛惜が，それを生み出した舞台や季節を丸ごと抱きしめたいくなる気分広がるのだ」。

この感情，とてもよくわかるな。土佐で行燈に照らされた絵金の芝居絵屏風に心揺さぶられたとき，絵金はもちろん，この世に美術というものが存在していてよかったって，天に感謝したい気分になったからね。

そうだ，N君はこのページで，マーク・ロスコの「ブルー・オン・ダークブルー」への感動によって，美術というものの存在を賛美したくなったと書いてあるんだけど，そう，そう，思い出した，さっきのちょっぴり涙ぐんでしまった話のことだけど，「オレンジ色の少女と夜学生」というタイトルの短篇だった。記憶の奥から甦った少女に，彩り豊かなワンピースを着せたいって，ほら，このページの最後の行に，「ヴァイオレット・オレンジ・イエロー・ホワイト・アンド・レッド」と書いてあるでしょう。これもロスコへのオマージュがあるわけだ。

ああ，やはりそうですか。N君が若いときに英語を教えに行っていたとかいう，工学系の夜間大学のエピソードですね。ある日，30歳をこえた電気工事店の職人が若い娘を連れてくる。妻は愛人と出奔しゅつぽんしてしまい，父子家庭なんですね。とてもおとなしい子で，授業中でも後ろの席で静かに座っている。「おとなしいというより，おとなしくすることしかできない様子の子だった」と，デリケートな書き方をしていますね。

夜学でもサークル活動があって，その学生は社交ダンス部に入っている。でも，男ばかりで女子学生はいない。休み時間に玄関ホールで練習を始めるけど，その学生は電気工事用の作業着を脱ぎ，袖口を両手でつかんで，それをパートナーに見立てて踊り始める。ぼろの垂れた，カカシを振り回すみたいな動きでね。すると，ソファに座っていた女の子が立ちあがり，きつめのジャンパーをぎこちなく脱ぎ，父の仕草を真似ようとする。ジャンパーの下から現われたオレンジ色のセーターが揺れて，小さな体が伸びをしている。そんなふうに，N君は少女の姿を蘇らせて，彩り豊かなワンピースを着せてあげた。私が感極まったのは，この場面なんです……。

ちょっと，つまらない意見を言っていていいですか。

この話のタイトルだけど，「夜学生とその娘」とか，「夜学生と女の子」とか，「オレンジ色」を取ってあっさりした方がよかったように感じるんだけど，どうかな。タイトルで色はいらないように思うけど。そう，そう，もう一つある。この2章全体のタイトルの「なつかしい場所を訪ねてはいけない」は，一見すると単純な言い方だけど，この本を読み進んでいくと，胸の奥がざわつく，意外に怖い表現だと思いました。それで思ったんだけど，この本のタイトルね，『幽明譚』よりも『なつかしい場所を訪ねてはいけない』にした方が，よかったんじゃないかな。

えっ，なんですか？ 耳が遠くなってしまって，よく聞こえないで，なんておっしゃったのかな？ ああ，最後までそのタイトルも候補に残っていたのですか。けど，やめたの？ 長いタイトルがこの

ところ本でも映画でも妙に流行っていて、何か読者に媚びる感じが嫌だった？ なんだ、そんなことですか。いやいや、つまらない理由じゃないかな。流行りがどうのこうのって、なんで気になるのかなー、そんなの、どうでもいいことでしょう。

『幽明譚』にしたのは、もう一つ理由がある？ 『転落譚』から始まって、『譚』3部作を考えていたから、2作目は『幽明譚』にしたということね。そうか、それで新しく連載を始めた小説が、『変声譚』になっているわけですね。人間やら動物やらの声色を使った腹話術的な作品とか何とか言ってたやつね。いや、いや、それはいずれ読むとして、今はどうでもいいことにしましょう。

えーと、どこにあったかな、どんどん上に積んじゃうんで、ここに来てから本が見つからないことが多くてね、狭いところだと、かえって整理が追いつかなくて、混乱状態になっていくのは普通のことですかね、あった、これだ、『転落譚』だよ、あちこち付箋が付いているけど、うまく思い出せるかな。えっ、何ておっしゃった？ 異物でも見るような落ち着いた気分になるか。そうですか。べたべた付箋が付いているからかもしれないですね。それなら、この本のことはやめましょう。じゃ、一言だけ述べると、この『転落譚』ですが、カバーの裏に後書きを印刷したりして、あれこれ企みがあって、いかにもN君らしい作りで、私の好きな小説なんだけど、どうだろうかな、こんどの新作、以前に比べてかなり読み易くなった印象があって、それは作者としてはどう思っているのかなって。

いや、いや、必ずしも退行的ということじゃないですよ。だから、それを含めてどう思っているか。他の人の感想はどうですか？ ああ、やっぱりそうでしょうね。二つに分かれている。でも、作者として、いつだって意図的に易しくしようと、難しくしようと考えて書いたことはないというのは、本当でしょう。難易の判断は二義的なものですから。いいことか悪いことかはともかく、結果的にどうなるか、作者じゃなくて作品自身が自己決定していくだろうくらい、私でも思いますよ。しかし、どうなの、それ本気ですか？

いやいや、私も何が言いたいかわらなくなってきてしまって、わけが判らなくなっているんだけど、まあ、この歳だからね、80代ならまだもう少しまともな感想が言えたはずなんだが、せっかく来てもらったのに悪いね。

それで、ちょっと思ったんだが、『ブラック・ノート抄』の方が、N君が前からよく言っている虚構への意志が感じられて、何というか面白い怪しげな難しさがあって、感心したんだけどね。どうですか。

笑っているけど、怪しげな難しさって、変な言い方でしたか。いや、いや、今とっさに口走っただけのことです。また、ふいに思い出したけど、返信メールに書いてあった、N君のお姉さまの話、どこかで関係がありはしない？ たしかお姉さまが、『ブラック・ノート抄』に比べて『幽明譚』の方は、嘘のつき方がまったく足りないって言ったとか？ そう、やはり言ったんですか、へー、すごい感想だ。姉としてあれこれ共通する体験の記憶があるわけだから、気になるんじゃないですか。普通なら、こことここが事実と違うと注文をつけるでしょうに、その逆だ。要するに、虚構への意志が不足している、もっと奔放な書き方をしなくちゃダメじゃないのということですね。これはぐっさときた鋭い指摘じゃなかったですか。

いや、いや、面白いお姉さんだね。ああ、85歳になりますか。前にも聞いた覚えがあるな、若い時から小説好きのお姉さんで、N君は学生時代、伊藤整とかモームとかの本だったか、嫁ぎ先の姉上の本棚から失敬して来たってね。えっ、何って言いました？ 姉上さんは大外れの感想も連発する？ いや、いや、何を言ってるの、それはN君に謙虚さが無いからでしょう、大外れは自分のほうじゃないですか。何だか、痛快な話になってきたな。

ああ、もう一つ何が言いたいか思い出した。しつこくタイトルのことに戻るけど、『ブラック・ノート抄』の方を『幽明譚』とした方がよくなかったかな。最後のあたり、笠間保から送られてきた文章が、主人公のものともまぜこぜになって、ふわふわ漂って、何だか怪しげな闇に入っていく感じがあるでしょう。もちろん、今となってはもう遅いと言うのは当然だけど。

その遅いという感覚ですが、遅れという自覚から始まる思索はとても大事ですよ、先走った前のめりの考えじゃ、ろくなものは出てこないし。いや、またまた何を言いたいのかわからなくなってきた。困ったもんだね。

〈一階の調理場から上がってくるのか、シチューの匂いが部屋に入ってきた。Nの住まいに近い小学校からも、昼近くになると似た匂いが流れてくることがある。〉

昼ご飯の時間のことなら、気にしないでください。食べなくてもいいんです。ここの介護士さんたちはみんな親切で、よく面倒をみてくれるけど、食事が合わなくてね、どれもこれも甘すぎて、げんなりなんだ。文句を言うと、分かりましたって、返事だけはするけど何も変わらない。だから、週のうち二日は外食をしなくちゃ、生きている心地がしない、これはこれで困ったことです。

そうだN君、吉祥寺でどこか美味しい鰻屋、知っているかな？ 二軒ある？ さすがだな。口に合うかどうかって、それはご心配なく。ご一緒していただけるなら、それは楽しみです。近いうちぜひお願いします。

ところで、まだ肝心な話が残っているんです。今日わざわざ来てもらったのは、わけがあったのことで、それで、N君ね、私の授業で採点に文句をつけてきたことがあるけど、覚えている？ えっ、何のことですかって、そんな大昔のこと、覚えているはずはない？

いやいや、そうなのか。2年生の哲学の授業だったか、前期試験の答案を返したら、先生、この89点という採点は何ですか？ 意味が分かりませんって、文句を言いに来たんだ。そう、覚えていないか？ 私が何と答えたかも覚えてないよね。いや、そんな失礼なことって、いまさら恐縮することはしないよ。

で、まあ、どう返事をしたか。私の授業は、せいぜい頑張って90点でしょう、100点満点じゃない。だから、89点はほぼ満点ということになるって、そう答えたんです。いかにも私らしいやりかたって、いまおっしゃっていただき、それはそれで、安堵するけど、でも、私の勝手な自己流の採点基準に、N君は納得してなかった。そうです、間違いなく生意気な学生でした。いや、いや前期だけで私の代わりに2回も講義をしてくれたんだから、文句を言うてるのは、まあ、当然だったけど。講義っておおげさな言い方でもないですよ、代講は代講だったんだし。想像力とは何か、そういうテーマでしたか。それは、しっかり覚えているんだね。

ええ？ 私が叱ったから覚えているわけ？ サルトルの想像力論なんて、つまらないものを持ち出しちゃだめだ、メルロ＝ポンティとか、せめてバシュラールをしっかり読みなさいって？ おや、そんな立派なこと、言ったんですか。いや、いや、そっちは私の方は記憶にないな。でも、サルトルの著作で最高なのは『聖ジュネ』だと、私は思っていました。ジュネの破天荒な不良少年時代に、サルトルは嫉妬やら、憧れやら、対抗心やら、賛嘆やらの気分が入り混じっていて、それが思索を深くしているように感じますが、どうでしょう。いやいや、でも、実際のところはどうなのか、もう読み直すことはないだろうけど。

〈階下から人声と食器の音が聞こえてきた。〉

昼食のことは、いいんです、心配しなくてけっこう。腹が減れば、どんな不味いものでも食べるだろうから。それで、わざわざ来てもらったのは、N君に差し上げるものがあつたからです。二つの

小説、なるほど、と何度もうなずいて、驚いたり、笑ったり、涙が出たり、考えこんだり、それから何より気持ちよく騙されたりして、これは傑作だと確信しました。ですから、あのときあげなかった1点、今度の作品への評価として加えます。びっくりですか？ 何よりのご褒美って、そこまでおっしゃられると、こちらが恐縮してしまいますが、この1点を加点するのに、半世紀以上もお待たせしたわけですから、お詫びしないといけません。でもやはり、今度の二つの小説は1点差し上げるのに値すると、心から思えるんですよ。いや、よかった。これでめでたく90点満点になりました。

〈二人とも大笑い。Nは辞去した。帰途、車を運転しながら、今度はNが不覚の涙をこぼすことになった。〉

14 求む、再就職先

『ブラック・ノート抄』の「ネズミ算式」で登場する骨董市の老店主が、かく語る。

——いよいよ閉店の時間となりました。お集まりいただき、あつく御礼申し上げます。いささか長口上になりますが、長いことごひいきにくださった皆様へご挨拶させていただきます。また、最後にあつかましいお願いもごさいます。

振り返ってみますと、こうして上野不忍の池畔の骨董市に出店させていただいてから、本年5月で半世紀の長きに及びます。70歳の年だけは、病を得て中断しなければならないときもありましたが、おかげさまでそれから10年間は何事もなく、力の及ぶ限り、世界の珍品・逸品を集めることに全力をそそぎ、お客様の熱い好奇心にそえるように、骨董屋のプライドにかけて頑張ってきました。

思い出せる珍品のなかでも、いかさま博徒の愛用した精巧極まるトランプは、よく手に入れたもんだと今でも自慢できます。アメリカのアリゾナのグランドール賭場から、その筋の人を介して入手したもので、幸か不幸かいかさま師のインチキがばれ、両手の指をハンマーで砕かれてしまったわけですが、いかさま男の不運があったからこそ、数字部分に秘密の細工を施したカードを手前どもが入手できた幸運があったわけです。ついでに申し上げれば、戦前に東京のドイツ大使館から来た外交官が、霞ヶ浦に車ごと転落してしました不幸な事故がありましたが、そのおかげで水没から救い上げた1930年代のカメラの「ローレライフレックス」が手に入ったわけです。どの専門業者が修理しても作動しないジャンク品にすぎなかったのですが、それを50円で買っていったカメラマニアの中学生が、なんと見事に直してしまったなんていう、嬉しいような、骨董屋にすれば悔しい話もありました。よみがえれば70万円はする逸品です。誰かの不遇が貴重な品を生み出すことがまあり、そうしためぐり合わせを少なからず見聞きするのが、この商売の面白いところでした。それから、クリックするとカーソルが勝手に反応して、文章の形容詞とか副詞とかいった修飾語が、好き勝手にどんどん増えていく、例の有名な黒いマウスなんていうものもありました。もっとも、そんな秘密の働きがあることなど、店頭にある時は気がつかず、購入した方から、ずっと後にお聞きした次第ですが。

当然、期待に反して失望したものもあります。牛の鳴き声を方言まで聞き分けると説明されていた、アルゼンチン製の古い通訳機ですね。どの牛もこぞって「われらのミルクを返せ、人間どもよ」と同じことしか叫んでいなかったのですから。

ある釣り好きの小説家から、ぜひ買ってほしいと依頼されたものもあって、それがヘミングウェイの愛用した釣り竿だったんです。キューバからアメリカ経由で苦労して入手したものでしたが、鑑定書のスペリングが変だって当の小説家先生から指摘されましてね。がっかりすることに、偽物だった

んです。アーネスト・ヘミングウェイの名前がA・Hemingwayと記してあって、アーネストはErnestですからEのはずで、そもそも名をイニシャルだけにすること自体で怪しい代物、実に幼稚な間違いを見逃して大失敗でした。本物なら、そもそも博物館行きでしょうから。

無事に話がまとまって、喜んでいただけた骨董品のひとつひとつ、どれも思い出深いことはもちろんですけど、市場で同業者とのセリに負けてしまった逸品など、いつまでもしつこく記憶から消えないものです。皆様をご承知かどうか判りませんが、アメリカの玩具メーカーに、「ルイス・マーシャル」という会社がありまして、1960年代に限定販売していた巨大怪物のクリーチャーがあったのです。当時としては斬新なりモコン式で動かすやつで、高さが70センチのマンモス・ガールなんですけど、赤い血走った眼を見開いて、身体を揺さぶりながら、背筋も凍るような甲高い奇声を発するんです。服が色あせて、ぼろになっているところも、いい味が出ていたんですよ。あれは1万円差で負けてしまい惜しかったです。

と、まあ、長い話になって、恐縮です。そんないろいろな思い出のある骨董屋人生も、今日でおしまいです。やり遂げたという思いはありますが、一つ心残りがありまして、ぜひ皆様のお力添えを拝借したいとあつかましく願っているしだいです。

実はこんな骨董屋でも、熱心に働いてくれた店員がおりまして、もっぱら倉庫整理にあたってくれていました。私が50歳のときに生まれた娘でして、今年30歳、孫の3歳の男の子が一緒です。この子もそれなりに働けますが、まあ、付属物とお考え下さい。思い通りに動いてくれませんが、愛嬌だけは申し分ありません。それで、ぜひともお願いしたいのですが、どこか再就職先はございませんでしょうか。きっと、娘は今日も倉庫で先の身の振り方の不安で、涙を流しているかもしれません。

いや、私自身がこの先どうなるか心もとない立場です。将来のことを考えれば、娘に早く次の仕事を探してあげたいのです。右手がやや不自由そうにしているときもありますけど、30年生きてきたとは想像しがたいほど元気で、まだまだ働けるはずですよ。専用のバッテリーもあと20年分はありますし、交換用の付属部品もそろっています。もちろん、男の子の装備品一式も完備しています。操作もメンテナンスもいたって簡単で、万一面倒なトラブルになりましたら、本人たちに操作手順をたずねれば、多少時間がかかるかもしれませんが、解決法を提案することでしょう。新たな就職先が見つかりましたら、まことに些少ではございますが、支度金の用意もでございます。

とても誠実によく働く娘で、きっとお役に立つと信じています。ただ、申し訳ございませんが、話し合い完了後のキャンセルはご勘弁いただきたく存じます。この老いぼれ骨董屋の願いをくみ取っていただける方がいらっしゃいましたら、後ほどご相談させていただきたいと思っております。では、いよいよ閉店の時間です。皆さま、長い間ありがとうございました。

執筆者について――

中村邦生(なかむらくにお) 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』(2009年)、『転落譚』(2011年)、『[幽明譚](#)』、『[ブラック・ノート抄](#)』(いずれも2022年)などが、批評には、『未完の小島信夫』(共著、2009年)がある。